

外来語の複合語における略語の語構成

林, 慧君
台湾大学文学院助理教授

<https://doi.org/10.15017/8931>

出版情報 : 語文研究. 97, pp.1-16, 2004-06-04. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

外来語の複合語における略語の語構成

林 慧 君

1. はじめに

多くの言語において、長大な語形は、その使用の必要性などによって短縮されたり略されたりする傾向がある。例えば、中国語の場合、「超級市場」（「スーパーマーケット」のこと）を「超市」、最近の政治の話題である「公民投票」（「住民投票」のこと）を「公投」と縮めたり、日本語の場合、「学生割引」を「学割」、「ゴム長靴」を「ゴム長」と語形を縮小したりするとおりである。そして、最近の若者ことばの中で「イケメン」のような短縮語が増えつつあることから、言語生活で「縮約」または「省略」という造語法がかなり生かされていることが窺える。

日本語の場合、外国語を借用する際、日本語の音韻構造によって音を変えて用いるので、どうしても語形が長くなる傾向がある。一方、外来語の著しい増加と多用に伴い、外来語の長い語形は、発音労力を軽減するためなどの理由で、その略語形がどんどん作り出されているのも一般的な傾向である。このような現状に注目し、本稿では外来語の複合語における略語を取り上げ、その語構成を分析しようとする。

外来語の複合語といえば、まずは、「イメージダウン」「アウトウエア」などのような、外来語成分どうしの結合によるものが挙げられようが、それ以外に、「システム手帳」「成年コミック」などのような、外来語成分を含む混種語も外来語の複合語と考えるべきであろう。後者は、広義での外来語の複合語とでも言えるもので、それを外来語の複合語の研究対象に入れるのは妥当な考えだと思われる。従って、「エンスト」や「ノークラ」は勿論、「朝シャン」や「アル中」のような例も、外来語の複合語における略語という、本稿の考察対象になる。以下、便宜上、外来語成分どうしの結合による外来語を「複合語」、外来語成分を含む混種語を「混種語」と言い、そして、両者を含めた、全ての外来語の複合語を「外来語の複合語」と呼ぶことにする。

ところで、「外来語の複合語」における略語の全ては、果たして同じ過程を経て成立されるのであろうか。次の二例を見てみよう。「デジカメ」というの

は、周知のとおり、「デジタルカメラ」という複合語の短縮形であり、短縮される前の形と短縮された後の形の両方とも用いられている。一方、「ヒレカツ」というのも「ヒレカツレツ」という複合語からの短縮形かと言えば、そう簡単には言えそうにない。「ヒレカツレツ」という複合語が実際に使われているかどうかがいまいな状態では、「ヒレカツ」を「ヒレカツレツ」からの短縮形だと言うよりも、むしろ、「ヒレ」という外来語成分が「カツレツ」の省略形「カツ」と複合した形だと考えたほうが自然であろう。要するに、「デジカメ」と「ヒレカツ」は、語の形成過程が違う略語だと言える。この、語形成過程が違う略語を混同して同じように扱くと、略語の語構成的な性質を取り間違えたりする可能性があるので、「外来語の複合語」の略語の語構成を論じるに当たっては、語形成過程を区別して検討を進めるべきであろう。

そこで、本稿では、「外来語の複合語」における略語について、まず語形成過程の違いによって二種類の略語に区別した上で、特に本稿の考察対象とする、外来語成分を含む「混種語」における略語（「レジ横」、「省エネ」など）及び外来語成分どうしの結合による「複合語」における略語（「ロケバス」、「エンスト」など）の造語実態を調査する。それを通して、語形成過程が異なる二種類の略語にいかなる異同、特徴があるのかを考察し、更に、「混種語」と「複合語」における略語の造語実態の相違を比較して明らかにしようとする。

2. 先行研究及び調査用例

日本語の略語に関する先行研究は少なからずあるが、その中で、特に外来語の略語について考察しているものとしては、主として菅野（1985）、田辺（1988）（1990）、佐野（1999）の四つを挙げることができる。

菅野（1985）は、主に形態の面から外来語の略語形を分類し、整理しているものである。また、田辺（1988）は、カタカナ語の略語とともに「ISDN」や「VTR」などのようなローマ字語の略語も扱っているが、そのなかでカタカナ語の略語に関して、略語の形態、即ち省略型を分類して概観している。この両者の、様々な略語形について分類を試みるという視点は、本稿と基本的には同じである。しかし、両者が略語の語形成過程という観点を問題にせず、複合語の略語を複合語全体からみる、いわば表層的な省略のしかたによる分類を行っているのに対して、本稿は、語形成過程の相違をも考慮した分類、即ち深層的な省略のしかたによる分類を行っているところが、根本的に違うのである。例えば、田辺（1988）が挙げた「エアコン」と「デパート」の場合、表層的な省

略のしかたによる分類だと、この二例は同じく、いわゆる「後省略型」というグループの略語に入るが、深層的な省略のしかたによる分類に従うと、異なるタイプの略語になる。詳しく言えば、「エアコン」は前項要素「エア」と後項要素の後部分短縮「コン（ディショナー）」との複合の略語であるが、「デパート」は前項要素の後部分短縮「デパート（メント）」と後項要素の全語省略（ストア）との複合の略語である。現に、田辺（1988：18）にも、

厳密に言えば、複合語型の省略型は、複合語を作る二つの要素がどのように省略されているかによって、分類するのが適当であろう。

と述べられており、深層の角度から省略の型を分類する必要について言及はしているものの、残念ながら、同論文にはその考えに基づいた論述は見られない。複合語の略語の問題なので、ただ複合語全体の語形表面上の省略具合（例えば、上略、中略、下略）によって分類するのではなく、複合語の構成に立ち戻り、即ち複合語を形成する成分がいかん省略されて略語に作り上げられたのかによって分析を行うべきであろう。

なお、田辺（1990）は、和製英語の形態についてかなり詳細な分類を行った考察であるが、中には、省略形の和製英語の形態に関する詳しい分類もなされている。しかし、扱った複合語の略語の場合は殆ど前述した「デジカメ」のような短縮形の略語であり、「ロケバス」「ロケ車輛」などのような、「ロケーション」からの省略形の成分「ロケ」が他の成分と複合した略語は取り上げられていないのである。

つぎに、佐野（1999）は、日本語への同化という観点から、外来語の音（拍数と拍の種類）の分析を通して、外来語の略語が日本語に同化する傾向を論じたものである。この、日本語への同化という観点に主眼を置くことは、「外来語の複合語」の略語における造語特徴を解明しようとする本稿の主旨とは違っており、また、同論文の外来語音の分析というアプローチも、本稿の、語形成過程の相違により略語を分類した上で複合語の略語の造語実態を論じる立場とは大きく異なる。

なお、考察対象である外来語の略語についても、上記の先行研究と本稿とは、次のような違いがある。まず、上記の論文は、「外来語の複合語」の略語のみならず、単純語の略語も取り上げられていることである。そして、「外来語の複合語」の略語の対象は殆ど「複合語」の略語を中心としたものであり、外来語成分を含む混種語の略語に関してはあまり論述されていない。しかし、本稿は、「外来語の複合語」の略語に関する考察なので、単純語の略語は扱わない

ことになるが、前述した如く、外来語成分を含む混種語も外来語の複合語の一種なので、外来語成分を含む混種語の略語も研究考察の対象にする。

調査用例に関しては、以前、筆者は「外来語の複合語」の語構成について、外来語成分を含む和製混種語と翻訳混種語を取り上げ、その両者における和語成分と漢語成分の、語構成上の性質の違い、そして「外来語の複合語」における語構成的な位置付けなどを論じたことがある^{注1}。今回も、その時の用例データ^{注2}を用いて、その中から混種語の略語を採集する。但し、この用例データにおいては、翻訳混種語の略語として、省略形造語成分「テレビ」と他の要素が複合した「テレビ会議」「液晶テレビ」という2例の略語、また「共同コミュニケ」という短縮形1例の、僅か3例しか見当たらなかった。即ち、「縮約」または「省略」という造語法は、翻訳混種語においては殆ど生かされていないことを確認したのである。従って、本稿では、「混種語」の場合、和製混種語の略語だけを取り扱うことにした。一方、今回は分析を行うことができなかった外来語成分どうしの結合による、和製の「複合語」のデータからも略語の用例を収集した。なお、「複合語」の略語の場合、前述した和製の「複合語」の略語以外に、例えば、「エアコン」などを本稿では入れている。「エアコン」の原形「エアコンディショナー」というのは和製語ではなく、外国語をそのまま借用した借用語の「複合語」なのであるが、その略語形「エアコン」は、語形上、日本語の造語法「縮約法」の操作によって作られた、和製の略語形なので、借用語の「複合語」からではあるが、和製の略語として分析対象の範囲に取り入れて妥当だと考えたからである^{注3}。

なお、例えば、「パジャマ」(pajamas)、「プログラム学習」(programmed learning)、「ジャックナイフ現象」(jackknifing) などのような、原語英語の拘束形態素(「~s」「~ing」「~ed」など)が省略されたものは日本語の省略または短縮として考えない。本稿は日本語の略語に関する考察なので、あくまでも日本語の形態素レベルで、語の構成を論じるべきだと考えるからである。日本語になった後の外来語形態素の省略は日本語の省略または短縮と考えられるが、日本語になる以前の段階にある原語の拘束形態素の省略は日本語の略語の問題としない。

それから、「PTA」「TPO」のような、いわゆるローマ字語の略語は本稿の考察の対象外にする。

3. 二種類の略語

次に、上述した調査用例の原則に基づいて採集した「外来語の複合語」の略語についてその語構成を分析する。

「外来語の複合語」の略語は、その語の形成過程で異なる点が見られる、と前に述べたが、本稿では、「外来語の複合語」の略語を、その語形成過程の違いを考慮して、次の如く分類する。

ア 省略語基の複合による略語

例：ロケ+バス ロケバス

コンビニ+店 コンビニ店

イ 複合語の短縮

複合語短縮：複合語の構成単位の一部が省略されるもの

例：アパートマンション アパマン

ビニール傘 ビニ傘

複合語語省略：複合語の構成単位の一方向の語が省略されるもの

例：マグカップ マグ

ツートンカラー ツートン

アの省略語基の複合による略語というのは、省略語基が他成分と複合してできたものをさす。例えば、アの「ロケバス」「コンビニ店」のような複合語は、「ロケ」「コンビニ」という省略語基がその元の語形「ロケーション」「コンビニエンスストア」の省略化によって成立した後、複合や派生といった造語法の段階で、他の成分「バス」、漢語接辞「店」と結合してできた略語である。

アに対して、イの複合語の短縮というのは、複合語を作り上げた成分の省略によってできたものである。例えば「アパマン」「ビニ傘」の場合、アとは逆に、先に「アパートマンション」「マグカップ」という外来語の複合語ができてから、その複合語の構成要素（「アパート」の「ート」、「カップ」）の省略によってできた複合語の短縮形である。このイの複合語の短縮は更に構成要素の省略され方によって、とに細分類できる。複合語短縮というのは、複合語の構成要素の一部が省略されるものをさす。例えば、「ビニール傘」の構成要素「ビニール」が「傘」と複合する際、その「ニー」の長音と「ル」が省略され、「ビニ傘」という短縮形ができたわけである。一方、複合語語省略とは、複合語の片方の構成要素が省略されるものをさす。例えば、「マグカップ」の場合、後項要素「カップ」の一部分ではなく、一語が全部省略され、複合語の前項要素「マグ」だけに短縮されたのである。「ツートンカラー」も「カラー」

という後部成分の一語が丸ごと略され、はじめて「ツートン」という短縮の語形^{注5}ができたわけである。

4. 略語の分析

以下、「混種語」と「複合語」におけるアとイをそれぞれ考察していくこと^{注6}にする。

4.1 省略語基の複合による略語

「混種語」と「複合語」におけるアの略語の複合語に関して、造語実態調査を通して、造語様相の異同を検討してみよう。

表1 外来語省略語基の位置別数

	外来語省略語基の結合位置		合 計
	前 項	後 項	
「混種語」	73	38	111
「複合語」	31	14	45

まず、表1の結合位置から見れば、省略語基は「混種語」と「複合語」においていずれも前項に位置する例が後項に位置する例より多く、約2倍近くになっている。即ち、省略語基によって外来語の複合語が作り上げられる際、その省略語基が前項に位置する傾向があることが明らかになった。

表2 外来語省略語基の拍数別及び省略語基によって作られた略語数

		単純省略語基			複合省略語基
		2拍	3拍	4拍	
「混種語」	省略語基数	15	10	6	8
	略 語 数	57(51%)	27(24%)	10(9%)	17(15%)
「複合語」	省略語基数	11	6	2	8
	略 語 数	17(38%)	17(38%)	2(4%)	9(20%)

() 内の%は「混種語」、「複合語」のそれぞれの全語数に対する比率。

次に、表2の拍数別の結果を検討してみることにしよう。表2からは、まず、「混種語」の場合、2拍の省略語基による略語例がいちばん多く、全体のほぼ半分ぐらゐを占めていることが特徴として挙げられよう^{注7}。言い換えれば、和語・漢語成分と複合して、「混種語」の略語を作る外来語成分の省略語基は2拍のものが多く、ということである。これは、その省略語基の結合相手である和語

に2拍のものが多いこと、また漢語には2文字4拍のものが多いことと関係していると考えられる。一方、「複合語」のほうは、2拍のほうに偏ることなく、2拍と3拍到分散していることが窺える。これは、「複合語」の省略語基の結合相手が和語、漢語ではなく、語形のやや長めの外来語成分だからであろう。

しかし、2拍の省略語基による複合の例と、3拍の省略語基による複合の例を合わせた比率が、「混種語」と「複合語」の両方において、ほぼ同じぐらいの高い生産率（「混種語」が75%で、「複合語」が76%）を示している。つまり、「混種語」と「複合語」の略語の造語において、ともに2拍・3拍の単純省略語基が一番寄与しているという共通点が観察される。これは、2拍のものが多く、ついで3拍の語が多い、という日本語の一般的な現象を裏付ける結果であろう。

なお、複合省略語基のほうは2、3拍の単純省略語基ほど造語力を有していないが、まだ1～2割りぐらいの生産率を示している。表2には書き記していないが、この複合省略語基は4拍のものが殆どである。

以上、「混種語」と「複合語」における省略語基の造語では、結合位置からしては、「混種語」と「複合語」の省略語基がともに前項に位置する傾向がある、という共通の語構成的な現象を検討した。そして、拍数からすると、「混種語」の省略語基の2拍集中傾向、「複合語」の省略語基の2拍・3拍への分散化とは様相を異にする、ということを明らかにした。

以下、省略語基によって作り上げられた略語の複合語を省略語基の拍数別にいくつか挙げる。^{注8}

(2拍) : レジ横、スト破り、指名スト、デパ地下、デパ屋、ロケ地、ロケ車
輜、ポリ袋、ゲバ棒、ビル清掃、雑居ビル、攻撃ヘリ、バリ解除、
プロ失格、ポリバケツ、ヘリコミューター、デマメール、ロケバス、
レッスンプロ、ターミナルビル、ステートアマ...

(3拍) : アジト移設、地下アジト、デフレ時代、テレビ電話、バスケット部、防
犯ビデオ、ビデオ説法、女性シンパ、アルミホイール、テレビニュー
ス、パンチパーマ...

(4拍) : コンビニ弁当、リストラ中退、木賃アパート、インフレヘッジ...

(複合語基) : ハイテク産業、パソコン販売、マスコミ車、ワープロ本体、中
堅ゼネコン、旅行用ボストン、パソコンアイドル、ノートパソコン、
セクハラモニター、ボケベルラジオ...

4.2 複合語の短縮

この節では「混種語」と「複合語」におけるイの複合語の短縮に関して、結合の拍数パターン及び短縮パターンから、その語構成的異同を検討してみる。

まず結合の拍数パターンからすると、両者ともに[2拍+2拍]のパターンがいちばん多い。「混種語」は全26例のうち21例あり、約80%で、「複合語」の場合は全86例のうち61例あり、約70%を占めている。即ち、[2拍+2拍]のパターンが外来語の複合語の典型的な短縮パターンだと言えよう。

次に短縮パターンから検討してみる。短縮のしかたにより、イの複合語短縮の短縮パターンを[a()+b()] [()a+()b] [a()+()b] [A+b()] [A+()b] [a()+B] と六種類に分けることができる。

まず、前・後項要素がともに短縮されるパターンには[a()+b()]と[a()+()b]、そして[()a+()b]があるが、[a()+b()] (例えば「エンスト」)とは、前項(「エンジン」)と後項要素(「ストップ」)がそれぞれ後ろの一部が略されてできた短縮語であり、[a()+()b] (例えば「パソコン」)は、前項要素(「パソコン」)の後ろの一部と後項要素(「アイドル」)の前の一部が略されたものである。そして、[()a+()b]は前項・後項要素がそれぞれ前^{注9}の一部が略されるものだが、このパターンは「混種語」の「億ション」(「(一)億」+「(マン)ション」)という1例しか見当たらない。

それから、複合語の前項要素が略されず、後項要素だけが略されるパターンには[A+b()]と[A+()b]がある。[A+b()] (例えば「ノーヘル」)は、後項要素(「ヘルメット」)の後ろの一部が略されたものであるのに対して、[A+()b] (例えば「ロムドル」)は、後項要素(「アイドル」)の前の一部が略された短縮例である。

次は逆に後項要素は略されず、そのまま残り、前項要素の後ろの一部が略される[a()+B]であるが、例えば「パトカー」は、後項要素はそのまま残り、前項要素「パトロール」が「パト」に短縮されたものである。^{注10}

以下にそれぞれのパターンの語例をいくつか挙げる。

[a()+b()]: ドタキャン、パチスロ、天パー、学ラン、ゲーセン、デジパチ、プリクラ、アマレス、シスオベ、ラジカセ...

[a()+()b]: コーポラス、ソフトノミックス、メロコア、モビレージ...

[()a+()b]: 億ション

[A+b()]: 赤ヘル、朝シャン、省エネ、脱サラ、バス停、ミニパト、ハイソ、ノンパラ、ノーコン...

[A + ()b] : カードホリック、シルバーピア、ロムドル

[a()+B] : パー券、リボ払い、ビニ傘、ピンぼけ、バトカー、ベリカード、
ポリボックス、エバミルク、ヤンママ、...

それから、イの 複合語語省略の方であるが、このタイプの短縮というのは、構成要素の一方が丸ごと省略されたものをさしているの、当然ながら「混種語」にはこのタイプの短縮形が存在せず、「複合語」にのみ見付かった。「複合語」に見られる語省略は、いずれも後語省略のタイプであることが特徴的である。複合語の後項要素が完全に略される[A + (B)]パターンと、場合によって同時に前項要素も一部略される[a() + (B)]パターンがある。例えば、「マグカップ」の後項要素「カップ」の語省略によってできた「マグ」という略語が前者の[A + (B)]パターンであり、「ポジティブフィルム」の後項要素「フィルム」が完全に略された上に、前項要素の後ろの一部「ティブ」も略された「ポジ」が後者の[a() + (B)]パターンである。

「外来語の複合語」における短縮形の（造語実態）調査結果をその短縮パターン別に示すと表5のとおりである。

表3 「外来語の複合語」における短縮パターン別の語例数

	短縮パターン	「混種語」	「複合語」
複合語短縮	[a() + b()]	12	38
	[a() + ()b]	0	7
	[()a + ()b]	1	0
	[A + b()]	9	18
	[A + ()b]	0	3
	[a() + B]	4	8
	[A + (B) + c()]	0	2
複合語語省略	[a() + (B)]	0	6
	[A + (B)]	0	4
合 計		26	86

上の表3から明らかなように、「混種語」と「複合語」における短縮パターンは、いずれも[a() + b()]が最も多く、その次は[A + b()]である。なお、[A + b()]の例が[a() + B]の例より多いという点でも共通している。要するに、前・後項要素のそれぞれの前の2拍ずつを取って短縮した[a() + b()]パターンが、最も生産性を持つ典型的な短縮パターンだと言えよう。そのほかに、前項要素が後項要素のどちらかが短縮されるパターンに限ってみると、[A + b()]の例が[a() + B]の例より多いということから、そして、特に「複

合語」にだけ起きる語省略の場合はいずれも後語省略ばかりということからも、「外来語の複合語」の短縮において、前項要素より後項要素の方が短縮されやすいと考えられよう。

以上、結合の拍数パターン及び短縮パターンという二つの観点から、「混種語」と「複合語」における短縮を検討した結果、基本的には両者が大体似ている語構成を示していることが明らかになった。

なお、前にも述べたが、アの省略語基による略語の造語の場合はその省略語基が複合語の前項に位置しやすいのに対して、イの複合語の短縮の場合は、後項要素の方が短縮されたり略されたりしやすい、という逆な造語的な特徴が見受けられた。

ここで、上述したアの省略語基の複合による略語とイの複合語の短縮語を区別した上で略語の語構成を分析すべきであるという点について、先行論述を参照しながら再び論じたい。

まず、前に述べた、[2拍 + 2拍]の[a() + b()]という短縮パターンが最も生産的であるということは、先行論究にも指摘されている。日比谷(1998 : 49)にも「複合語短縮という操作によって形成される略語の大半は、前項要素のはじめの2モーラ + 後項要素のはじめの2モーラという構造になっている」と論述されている。

ところで、鈴木(1998 : 42)に略語の省略の方法別にその語数が表にして示されているが、その分布の特徴について「複合語の各後半部を省略して各前半部を残す方法は、6位であり、一般に考えられている結果と異なる」と述べられている。しかしこれは鈴木氏が「複合語の短縮」と「省略語基による複合」とを区別せずにいっしょに入れて考えたからであろう。その表の中に順位5の「複合語のA後略」、例えば、そこに挙げられた「プロボクシング」は、複合語の短縮ではなく、省略語基「プロ」と「ボクシング」の結合によりできた略語の複合語だと筆者は考える。本稿の4.1で指摘したが、省略語基が複合語の前項に位置する傾向があるわけなので、このようなタイプの語例も一緒に考えると、複合語の短縮において生産性をもつ「複合語の各A B後略」パターンの順位が後退することがあるであろう。しかし、繰り返しになるが、語形成過程が異なるため、区別して論じる方が妥当だと考えられる。

では、ここで次の諸例を見てみよう。

ゼネコン (general contractor)、ミスコン (miss + contest)、

ボディコン (body + conscious)、ノーコン (no control)、
シスコン (system + component)、ファザコン (father + complex)、
エアコン (air conditioner)、ツアコン (tour conductor)、
生コン (「生コンクリート」の略)、合コン (「合同コンパ」の略)

これらの略語は、後項要素が全て「～コン」になっているが、それぞれの元の洋語はというと、括弧の中に記してあるとおり、いずれも違うものである。つまり、それぞれの「～コン」は、まったく異なる原語からの省略形である。このような「～コン」について、森岡 (1985 : 52) には「接辞の付いた派生語の印象が強い」と記述されており、山下 (1994 : 86) もこの「～コン」というようなものを「省略形の『造語成分』」と扱っている。確かに原語は異なるが、「～コン」という音声形は多くの仲間をもっていて、安定感があり、「～コン…」の形をもつ新しい複合語が出てきたら、すぐに「～コン」という略語を作りやすい環境ができていて、ということも考えられる。ところが、語の形成過程から考えると、上記の例は、例えば、次の

ゼネラル+コントラクター ゼネラル・コントラクター ゼネコン
ボディ+コンシャス ボディ・コンシャス ボディコン
ファザー+コンプレックス ファザー・コンプレックス ファザコン
生+コンクリート 生コンクリート 生コン

のごとく、省略される以前の、様々な「～コン」の原形がまずそれぞれの前項要素と結合して複合語を作り、その後からさらに短縮されて出来た語形だと考えられる。つまり、まったく違う構成要素からの略語を、一つの語基 (或いは造語成分) にまとめて考えるのではなく、上記の諸例は、それぞれの外来語の複合語の短縮形として扱うべきであろう。^{注11}

要するに、造語法から言えば、「ゼネコン」をはじめ、「シスコン」などの「～コン」の複合語はいわゆる (「派生」と「複合」が含まれる) 「合成法」による造語ではなく、「縮約法」による造語である。語の根本的な成り立ち 造語法を見極めない上で語構成を論じると、その語の本質、構造などを正確にとらえられない恐れがあるであろう。

4.3 「混種語」と「複合語」の略語における造語実態の相違

4.1と4.2では「混種語」と「複合語」における、省略語基の複合による略語及び複合語の短縮をそれぞれ分析してきたが、ここで、この両者における二種類の略語の内訳を表にまとめなおしてみることにする。

表4 「混種語」と「複合語」における略語の種類別数

	省略語基による造語数	複合語の短縮語数
「混種語」	111	26
「複合語」	45	86

表4により、「混種語」と「複合語」における略語は、まさに逆な造語現象になっていることが明らかになる。「混種語」の場合は、省略語基による造語数(111例)が複合語の短縮(26)よりずっと多く、約4倍余りである。それに対して、「複合語」の場合は、逆に、短縮語数(86例)が省略語基による造語数(45例)に比べ、2倍近くなっているのである。要するに、外来語の省略語基が和語・漢語成分、特に漢語成分と混種語を作り上げやすいのに対して、「複合語」の場合は、省略語基による造語よりも複合語の短縮が起こりやすいということである。^{注12}

外来語成分の一部が省略された省略語基は語形が簡潔であるが、その省略によって意味が抽象化されたりすることがある。その欠点を補うためであろうか、意味表示機能を果たせる漢語成分や、または馴染みの深い和語成分と結合しやすいと考えられよう。なお、4.1で論じた、この場合、省略語基が複合語の前項に位置するものが多いという傾向に関しては、いわゆる「右側主要部規則」^{注13}という原則によって説明できる。要するに、右側要素が語全体の統語的、意味的特徴を決定する主要的な役割を果たすことにより、意味の抽象化という欠点を有する省略語基は、複合語の意味範疇を決定する「右側」には位置しにくく、複合語の前項に位置して複合語の修飾要素になりやすいわけであろう。

但し、4.1の表1に見るが如く、省略語基が後項に位置する例がやはり存在している。これらは、「右側主要部規則」に当てはまらない例ではあるが、実際の語例を見ると、例えば、「空港ビル」「宣伝ビデオ」「木造アパート」「大型ヘリ」「大手スーパー」などのように、これらの後項要素に位置する省略語基は、多くの場合、日本語として馴染みの深い基本語彙と言えらるぐらいの外来語成分が多い。これらの、日本語の基本語彙となったとも言える省略語基は、語形の省略による意味の抽象化と言った欠点をもたないため、複合語の後項、即ち「主要部」に位置し得るであろう。

一方、「複合語」、つまり外来語成分どうしの結合による複合語は、その語形の長さの欠点により、複合語全体が短縮されやすいのであろう。この場合は、4.2にも述べたように、前項要素よりも後項要素の方が短縮されたり略された

りしやすいという造語的な特徴があるが、これらには先ほど述べた「右側主要部規則」という語構成の原則が適用されないことになってしまう。では、それはどうしてだろうか。その理由は、略語の語形成過程に関わるものと思われる。複合語の短縮という語形成過程は、先に複合語ができあがり、その後に短縮が起こるものであり、これらの略語を使うときに（意識の中では）、略される以前の、いわば複合語原形が潜在的に理解され、たとえ「主要部」の後項要素が略されたりしても、その略語に対する意味理解に支障は起こらないものと思われる。むしろ、鈴木（1998：42）に述べられたとおり、前項要素の短縮より、後項要素の短縮の方が、複合語原形復元の可能性（効率性）が高いから、後項要素の方が短縮されやすいものと考えられよう。

5. おわりに

以上、本稿では「外来語の複合語」の略語について、まずその語形成過程の違いによって、略語を二種類に分ける必要のあることについて述べた。そして、その二種類の略語を区別した上で略語の語構成を論じるべきことも論じた。また、「混種語」と「複合語」の造語実態調査を通して、語形成過程が異なる二種類の略語が「外来語の複合語」においていかなる造語様相の異同、特徴を示しているのかも検討してきた。

結論としては、外来語成分の省略語基の複合による略語に関して、結合位置から考察した結果、「混種語」と「複合語」の省略語基がともに前項に位置する傾向があるという共通点が見られた。しかし、拍数からすると、「混種語」の省略語基の2拍集中傾向に対して、「複合語」の省略語基の2拍・3拍への分散化という相違点が明らかになった。一方、複合語の短縮の場合、拍数と短縮パターンから、基本的には「混種語」と「複合語」が大体類似している語構成を示しているのを確認した。

なお、「混種語」の略語には外来語成分の省略語基の造語によるものが多いのに対して、「複合語」の方には複合語の短縮によるものが多い、という逆の造語現象が観察された。この点からは、語形成過程の違う略語と語種の異なる略語の造語との関わりが窺えると言えよう。また、「外来語の複合語」における二種類の略語においては、省略語基の外来語成分が前項に位置する傾向があるのに対し、複合語の短縮の場合は後項要素の方が略されやすい、という逆の造語的な特徴が見受けられたことを言及し、その理由についても論じた。

外来語は、現代日本人の言語生活では、なくてはならない存在になってきて

いるが、そのような外来語の普及の勢いの中で、省略語基の外来語成分による造語や複合語の短縮化によってどんどん効率的で多彩な外来語の略語が作り出されていき、そして、その外来語の略語は日本語の伝達活動でますます大きな役割を果たしていくことが予想できよう。

最後に、本稿の注11に言及した、「～コンプレックス」の短縮形「～コン」が省略語基になる傾向があることのように、複合語の短縮と省略語基の造語との間の関連性なども興味深い問題であろう。今回は詳しくは触れられなかったが、今後の課題としたい。

注

注1 拙稿 (2003) を参照されたい。

注2 拙稿 (2003) に用いられた、「外来語の複合語」の用例データは、次に挙げる資料から採集したものである。

『ジャンル別編集 最新カタカナ用語「読む見る」事典』講談社編 1998年 講談社

『AERA』2001年4月 - 2002年2月(第14巻17号通巻695号 - 第15巻8号通巻742号の偶数月分の巻頭記事)

『01年鑑代表シナリオ集』シナリオ作家協会編 2002年 映人社

『冬のオペラ』北村 薫著 2002年 角川書店

『レクイエム』篠田節子著 2002年 文藝春秋

『とんがらしの誘惑』椎名 誠著 2002年 文藝春秋

注3 但し、拙稿 (2003) の段階では、借用語の「複合語」は取り集めなかった。本稿では、借用語の「複合語」の略語は、適宜追加して考察に取り入れたことを断っておく。

注4 川上 (2001 : 3-5) は、略語の形成過程を、「削除操作」(例えば、「エンジンストップ」「エンスト」と「組成操作」(例えば、「トレ (-ニング) + シャツ トレシャツ」という二段階で考えている。また、従来、略語の造語において、の「削除操作」のみで説明するのは不十分であり、の「組成操作」も視野に入れることが重要だと論じている。この言及からしても、アの「省略語基の複合による略語」を「外来語の複合語」の略語とする本稿の考え方は妥当だと考えられよう。

注5 この 複合語短縮と 複合語省略については、佐野(1999 : 3)を参照されたい。

注6 この、略語を二分類する考え方は、先行研究にもその記述が見られる。日比谷(1998 : 48)に、窪園(1995)からの引用で、語形成過程を「ア 付加的操作 (派生、 複合)」と「イ 削除的操作 (混成語形成、 複合語短縮)」と分類され、示されている。本論で述べた「ア 省略語基の複合による略語」がまさに窪園(1995)の「ア 付加的操作」に、そして「イ 複合語の短縮」が「イ 削除的操作」の「 複合語短縮」に当てはまる略語の分類である。

注7 川上 (2001 : 13) にも洋語の形態短縮型には「各分析単位が2モーラの省略形造語成分に短縮される場合が多い」という指摘があり、そして、山下 (1984 : 86)

にも省略形「造語成分」が外来語の造語にかなり寄与しており、その「省略形「造語成分」は、2拍のものが多くなっている」と記述されている。本稿でも同じ傾向が検証できた。

注8 波線がついているのが省略語基である。

注9 『大辞林 第二版』によると、「億ション」は、「『マンション』を『万ション』としゃれて」作られた語ということになるが、いずれにせよ、「(一)億」と「(マン)ション」との結合からの短縮形だと考えてよいであろう。

なお、前・後項要素がともに省略されるパターンのうち、 $[()_a + b()]$ というパターンの例は筆者の今回の調査では見つけることができなかったが、田辺 (1990 : 18,24) にはこのパターンの略語は「ハマトラ」(「横浜トラディショナル」の略) という例が挙げられている。が、合計僅か2例しかないということで、 $[()_a + b()]$ はやはり殆ど生産性のない短縮パターンだということが窺える。

注10 筆者の用例調査では、後項要素が略されず、前項要素が略されるものうち、 $[a() + B]$ パターンは存在しているが、 $[()_a + B]$ パターンは見当たっていない。田辺 (1990 : 23) には $[()_a + B]$ パターンの例として「塚ガール」が挙げられているが、このパターンも他のパターンに比べると、あまり生産性のないようである。前項要素の前の部分が略されるのはやはり異例のように思われる。現に、前述した $[()_a + ()_b]$ という前・後項要素のそれぞれの前部分が略されるパターンも、「億ション」という1例しか見当たっていない。それは、複合語の最初の要素の前部分が略されると、その略語の意味理解に支障が起こりやすい可能性があることと関わるのではないかと考えられる。

なお、今回の外来語データには三次結合の $[A + (B) + c()]$ というパターンも見られ、「オフレコ」と「オンレコ」2例あったが、これは前項要素(「オフ」「オン」)がそのまま残り、中間要素(「ザ」(the))が完全に略され、そして後項要素(「レコード」)の後ろの一部が略された短縮形である。

注11 様々な「~コン」の中で、「コンプレックス」から縮約された「コン」は、「ファザコン」「マザコン」「ロリコン」などからわかるように、確かに省略語基化しているとも言えよう。筆者の調査では「海苔好きで「ノリコン」と言われてきたおれはずっと味付け海苔をバカにしてきたが、...」(『とんがらしの誘惑』202頁)という例が見られたが、この「ノリコン」も前項要素の「ノリ」に省略語基化した「~コン」が複合して出来たものであろう。

ただし、本論に述べたとおり、異なる原語からの省略形「~コン」をもつ略語は、やはり各々の異なる外来語の複合語の短縮形と見るべきであろう。

注12 本稿で対象にした外来語の略語は、拙稿(2003)の外来語の複合語のデータ(996語の「混種語」と973語の「複合語」)からピックアップしたものである。語例数は多くはないものの、一つのサンプリング調査にはなれると思われる。このサンプリング調査から見られた、本論で述べた造語現象、造語的特徴は現代外来語の複合語における略語の語構成の性質を十分反映していると考えられる。

注13 「右側主要部規則」という、語形成過程に観察される、多くの原語に共通する原理については、窪園 (1995 : 190~194) を参照されたい。

参考文献

森岡健二 (1985) 『外来語の派生語彙』 『日本語学』 4 - 9 明治書院 p.43 - 53

- 菅野 謙 (1985) 「洋語の略語形」『日本語学』4 - 9 明治書院 p.54 - 64
- 田辺洋二 (1988) 「外来語の略語 - カタカナ語とローマ字語」『日本語学』7 - 7 明治書院 p.13 - 21
- 田辺洋二 (1990) 「和製英語の形態分類」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』2 p.1 - 26
- 石野博史 (1993) 「略語の造語法」『日本語学』12 - 10 明治書院 p.57 - 64
- 山下喜代 (1994) 「語の構成要素 - 国語辞典における「造語成分」について - 」『早稲田大学 日本語研究教育センター紀要』6 p.71 - 102
- 窪園晴夫 (1995) 「第3章 混成語形成と音韻構造」『語形成と音韻構造』くろしお出版 p.143 - 202
- 鈴木俊二 (1998) 「外来語の語構成」『国際短期大学紀要』13 p.29 - 49
- 日比谷潤子 (1998) 「複合語短縮」『世界の日本語教育』8 国際交流基金 日本語国際センター編集・発行 p.47 - 65
- 佐野江美 (1999) 「外来語の略語の語構成 - 音における「同化」の分析」『国文目白』38 p.1 - 14
- 川上真紀子 (2001) 「造語成分からみた語の省略法の類型化」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』47 p.3 - 15
- 林 慧君 (2003) 「外来語成分を含む混種語の和語・漢語成分について - 翻訳混種語と和製混種語との比較から - 」『台大日本語文研究』5 p.163 - 190

【付記】

本研究は台湾「國科會第四十二屆補助科學與技術人員國外短期研究」による研究成果の一部である。

(りん けいくん・台湾大学文学院助理教授)